新・国立競技場はどのような意図で設計されたか？

谷川　大輔（建築学科）

『なぜぼくが新国立競技場をつくるのか　建築家・隈研吾の覚悟』

隈研吾著　日経 BP 社　2016

今年 2020 年は、2 回目の東京オリンピックが行われる年である。7 月に行われるオリンピックに向けて、新しい駅ができたり、建物が高層化したり、東京は今、ものすごい勢いで変化をしている。その 2020 年東京オリンピックの中心であり象徴である国立競技場も、新しく建て替えられた。ご存知だろうか。設計者は、建築家・隈研吾氏である。今回は、この隈研吾氏の『なぜぼくが新国立競技場をつくるのか』である。建築学科の学生にはもちろんぜひ読んでもらいたいのだが、みなさん全てに読んで頂き、このオリンピックという世界的なイベントにおいて、建築とはどういうことなのか？建築家とはなんなのか？ということを考えてもらいたい。

まず建設の経緯をおさらいすると、新国立競技場は、2012 年に第一回目のコンペティションが行われ、46 点（国内 12 点、海外 34 点）の応募から、英国の設計事務所、ザハ・ハディド・アーキテクツが最優秀賞に選ばれた。審査員は、安藤忠雄や内藤廣といった日本を代表する建築家だった。最優秀賞に選ばれた設計者のザハ・ハディド氏は、世界的に有名な女性の建築家で、流れるような形態の建築を設計することで知られている。選ばれた新国立競技場の案も、流れるような形のデザインで、スポーツの躍動感や人々の流れを表現した素晴らしいものに思えた。しかしこの時点では、2020 年のオリンピックが東京で行われることは決まっておらず、また 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災の後で、国民の関心はそれほど高くはなかったと思われる。その後、2013 年 9 月 7 日に 2020 年のオリンピックが東京に決定し、2015 年に建設費などを理由にザハ氏の提案は白紙撤回となり、再コンペが行われることになった。ザハ・ハディド氏は、2016 年に亡くなってしまった。そしてこの再コンペで最優秀賞に選ばれ、実現したのが 2019 年に完成した隈研吾氏が設計した新・国立競技場である。再コンペでも、最終的に 2 案に絞られ、A 案と B 案で国民的議論を巻き起こした。このような経緯を通して、実現した新・国立競技場を通して、今一度われわれにとって『建築』とは何か？『建築家』とは何か？について考えて頂きたいと思う。

『建築』は『芸術』であると私は考えている。逆を言うと『芸術』と思えるもののみが『建築』であると考えている。私の担当する『芸術論』の授業で、最初に問いかけている。『芸術』とはなんですか？『芸術』がなくても生きていけますか？と。『芸術』に対する解釈は一つではなく、さまざまだと思う。また『芸術』がなくても生きていけるとは思う。しかし、芸術ということを考えること、芸術という視点で物事を見ることは、私たちの人生をより豊かなものにしてくれるはずである。だから、『建築』も芸術という視点から考えてみると、私たちの生活はより豊かになると思う。この意味で『建築家』は『芸術家』であるべきであり、そのような状況をみんなでつくる必要があると思う。そのようなことを考える具体的なきっかけとして、この本を紹介したいと思う。